

日蓮大聖人御書全集

ときにゆうどうどのごへんじ

富木入道殿御返事

がんばろうぶつこく こと

(願望仏国の事)

新版
1282
〜
1283

ときにゆうぎゅうどのへんじ がんぼうぶつこく こと

富木入道殿御返事（願望仏国の事）

ぶんえい ねん がつ にち さい ときじょうにん

文永8年(71) 11月23日 50歳 富木常忍

ころ じゅういちがつ げじゆん そうしゅうかまくら そうら とき

この比は十一月の下旬なれば、相州鎌倉に候いし時の

おも しせつ てんぺん ばんこくみなおな ぞん そうら

思いには、四節の轉變は万国皆同じかるべしと存じ候いし

ほっこく さだのくに くだ っ そうら のち ふたつき

ところに、この北国・佐渡国に下り着き候いて後、二月は

かんふう ふ そうせつ とき ひ

寒風しきりに吹いて、霜雪さらに降らざる時はあれども、日

ひかり み はっかん げんしん かん ひと こころ

の光をば見ることなし。八寒を現身に感ず。人の心は

きんじゆう おな しゅ し しん し ぶつぼう

禽獣に同じく、主・師・親を知らず。いかにいわんや、仏法

じゃしよう し ぜんあく おも

の邪正、師の善悪は思いもよらざるをや。これらはしばらく

くこれを置く。お

い じゅうがつとおか つ そうら にゅうどう てらどまり かえ

去ぬる十月十日に付けられ候いし入道、寺泊より還

そうら とき ほうもん か つか そうら すいりようそうろう

し候いし時、法門を書き遣わし候いき。推量候らん。

がんぜん ほとけ めつごにせんにひやくよねん がつし かんど

すでに眼前なり。仏の滅後二千二百余年に、月氏・漢土・

にほん いちえんぶだい うち てんじん りゅうじゆ うち かんが れいねん

日本・一閻浮提の内に、「天親・竜樹、内に鑑みるに冷然

ほか とき よろ かな うんぬん てんだい でんぎよう

にして、外には時の宜しきに適う」云々。天台・伝教はほ

しゃく たま ひろ のこ いちだいじ ひほう

ぼ釈し給えども、これを弘め残せる一大事の秘法を、この

くに はじ ひろ にちれん ひと

国に初めてこれを弘む。日蓮あにその人にあらずや。

ぜんそう あらわ い しようか おおじしん ぜんだいみもん

前相すでに顕れぬ。去ぬる正嘉の大地震、前代未聞の

だいたいずい かみせじゆうに にんのうくじゆうだい ほとけ めつごにせんにひやくよねん
大瑞なり。神世十二・人王九十代、仏の滅後二千二百余年、
みぞう だいたいずい
未曾有の大瑞なり。

じんりきほん い ほとけめつど のち よ きよう
神力品に云わく「仏滅度して後において、能くこの経を
持たんが故に、諸仏は皆歡喜して、無量の神力を現じたも
う」等云々。「如来の一切の所有の法」云々。

いちぶん やく だいはうひろ たも にぜん しゃくもん きようぎよう
ただし、この大法弘まり給うならば、爾前・迹門の經教
は一分も益なかるべし。伝教大師云わく「日出でぬれば星
隠る」云々。遵式、記して云わく「末法の初め、西を照ら
す」等云々。法すでに顕れぬ。前相、先代に超過せり。

にちれん

かんが

とき

ゆえ

日蓮ほぼこれを勘うるに、これ時のしからしむる故なり。

きよう

い

しどうしあ

いち

じようぎよう

な

うんぬん

経に云わく「四導師有り。一に上行と名づく」云々。ま

い

あくせまつぼう

とき

よ

きよう

たも

い

た云わく「悪世末法の時、能くこの経を持たば」。また云わ

しゆみ

と

たほう

な

お

うんぬん

く「もし須弥を接つて、他方に擲げ置かんも」云々。

きへん

もう

つ

いつさいきよう

ようもん

ちろん

ようもんごじよう

また、貴辺に申し付けし一切経の要文、智論の要文五帖、

いっしよ

と

あつ

そうろう

ほか

ろんしやく

ようもんさんざい

一処に取り集めらるべく候。その外、論釈の要文散在あ

そうろう

しようそう

だんぎ

おほ

るべからず候。また小僧たち、談義あるべしと仰せらる

そうろう

べく候。

るぎい

いた

なげ

たも

かんじほん

い

流罪のこと、痛く歎かせ給うべからず。勸持品に云わく、

ふきようほん
不軽品に云わく。

いのちかぎ あ お
命限り有り、惜しむべからず。ついに願うべきは仏国な

うんぬん
り云々。

ぶんえいはちねんじゆういちがつにじゆうさんにち
文永八年十一月二十三日

にちれん かおう
日蓮 花押

ときにゆうどうどのごへんじ
富木入道殿御返事

しょうそう しょうしょうかえ そうろう くに ていたらく ざいしよ あ
小僧たち、少々還し候。この国の為体、在所の有
さま おんと そうろう ひったん の がた そうろう
り様、御問いあるべく候。筆端に載せ難く候。